
流星少年

月島

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星少年

【Nコード】

N5389F

【作者名】

月島

【あらすじ】

好きな人がいないわけじゃない。ただ、遠すぎて見てるだけ。なぜなら、彼女はアイドルだから。そんな僕の気弱な物語。

長月（前書き）

初めての拙い文章ですが、よろしく願います。

長月

なぜ人は流れ星に願いをこめるのか、今は分かる気がする。それは、決して届かぬ願いを、ほとんどが大地に届かず燃え尽きるその輝きに重ね託すからなんだ…

ハア　ハア　ハア

僕は今、一生で一度出さなにかぐらい滅多に出したことのない頑張りをもせて駆け上っている。

僕は滝谷^{タキヤ} 弘人^{ヒロト}

ちょうど今、門をくぐった学校、この西功高校の一年生だ。この学校は住宅街の真ん中にある丘の上にあり、さっきの僕のような遅刻すれすれの生徒にはまるでゲームのラスボスのようにこの丘が立ち上がるんだ。

やっとの思いで教室にたどり着くと時刻は遅刻一分前。ホッと一息ついて僕は自分の席に着いた。

「どうした？こんな時間に珍しいな」

後ろの席のイケメン 神藤^{シンドウ} 涼^{リョウ}が話かけてきた。涼は小学校からの付き合いで、クラスの中で影の薄い僕の数少ない友達だ。

「昨日目覚ましかけるの忘れてたんだ」

「ふーん、あつ小林が来たぞ」

担任の小林先生が入って来たため僕達の会話は、中断された。

「はい、みんな座って。出席とりまーす」

小林先生は、美人で明るくまるで生徒のようなノリなので男女に人気がある。

「愛甲君、飯島君、伊藤君、井上君、……渡辺君、綾戸さん、は、今日も休みね」

綾戸^{アヤト} 理恵^{リエ}さんは、9月に入ってもう五日も休んでいる。それでも先生が何も言わないのは、彼女がアイドルだからだ。彼女はテレビではアヤリエと呼ばれていて、彼女を見ない日は無いくらいCMやドラマに出演していた。

この学校に入学した時はアイドルのアヤリエが入学すると一時期すごい騒ぎだった。彼女が居るこのクラスには、連日ひとだかりが出来ていた。

僕も彼女をテレビでよくみていたけれど、テレビでよく見る女の子としか思っていなかった。

確かに彼女は、この世のものとは思えない美貌をしていたが、その感想は現実の彼女を見た時も変わらなかった。

彼女は、性格もとても明るく友達もすぐにたくさんでき、学校内のアイドルになつていくのには、そう時間はかからなかった。

彼女の靴箱にはいつも何通ものラブレターが入っており、男子の告白を受けるのもよくある事だった。

でも、そんなある日僕は体育館の裏で男子に告白されているところを見てしまった。

「君の事が好きなんだ。付き合ってください。」

「ごめんなさい。私誰とも付き合つ気はないの。でも、友達なら大歓迎よ」

見事玉碎。その男子は、肩をおとして帰って行った。彼女は、その男子が校舎に入って行くのを見ると、一瞬、悲しげな顔をしてその男子の入って行った入口を見つめると、彼女も校舎へ入って行った。その日から、僕の頭に彼女の悲しげな顔がはなれなくなった。

僕は彼女の事を好きになっちゃってしまっていた。

だけど、自分の気持ちに気付いても、僕は彼女を遠くから時々見つめるだけだった。いや、僕は彼女を見つめるだけで、満足だったんだ。

成績は平凡で顔は小学生みたいな童顔、運動は並以下。こんなコンプレックスの塊みたいな僕には、振り向いてすらもくれないって分かってたから。

そして、そのまま何も状況は変わらず今に至る。

「綾戸、今は広島でライブツアー中らしいぜ」

涼がそう話しかけてきた時、小林先生がHRを終わらせて教室をでて行った。号令などは、小林先生の「面倒くさい」の一言でなくなつて久しい。

「ふーん、そうなんだ。アイドルも大変だね」

「何言つてんだよ。本当はすごく気になってるくせに。俺にはバレバレなんだよ」

「ちよっ！声が大きい静かに話してよ」

綾戸さんへの想いは、自分の中にしまっていたはずなんだが、勘のいい涼には気付かれていた。だから涼と話す時はよく、からかわれ

ている。

「良いじゃないか。本当の事なんだし」

「良かねーよ！僕に対する守秘義務を全うしてよ」

「あら、ふたりともいつも仲が良いわね」

僕が自分でも訳の分からない突っ込みをしていると、ちよつとずれた事を言いながらこのクラスの委員長サナダンホの真田 詩穂が会話に割り込んできた。真田さんは、委員長だけどもものすごい天然だ。このクラスの将来が思いやられるよ

「あのー真田さん、僕達の会話が仲が良さそうに見えますか？」

「うん、とっても」ニコッ

そんな笑顔で言われましても……。真田さんはとてもかわいい顔をしている。この笑顔にはいつも負けてしまう。だから委員長として成り立っているのかもね。

「もういい。聞いた僕が馬鹿でした」

「なあ俺、今日ノート忘れたから滝ルーズリーフくれよ」

「しょうがないなー貸してやるよ」

「おっ！さすが滝、恩に着るぜ。だから滝とは友達やめられないんだよなー」

「僕の価値はルーズリーフ一枚かよ！」

放課後、僕は屋上で寝転がっていた。この学校は丘の上なのでとても見晴らしがいいので、僕はいつもここで放課後、涼がサッカー部の部活を終わるまで待つのだった。本当はここには来てはいけなのだが、鍵が壊れていたでここに入ることができた。しかも、そのおかげで人が入って来ないので、ここを僕は気に入っていた。

「滝、帰るぞ」

「あつ、もう終わったんだ。今日は早かったんだね」

「ああ、今日は顧問がいなかったからな」

「じゃあ、帰ろっか」

僕達は、屋上から降りて学校をでた。

涼とは、俺の家の前で別れる。涼の家は、ここからさらに歩いて二分ぐらいのところにある。帰りはいつも一緒だが、行きは涼が朝練があるので、一緒ではない。

「じゃあまた明日な、滝」

「うん、またね」

「あつ！そういえば綾戸は全国ツアー広島で終りだから明日はいるかもよ」

「ふーん、そうなんだ。それじゃ」

「おい！軽く流すなよ。まあいいや。じゃあな」

涼のやつめ最後までからかう気かよ。ブツブツと文句を言いながら僕は玄関を開けた。

「ただいま」

「おかえり、弘人」

「あれっ、悠さん帰ってたんですか？」

この人は、宇都宮^{ウツノミヤ} 悠僕^{ユウ}の育て親である。悠さんが何の仕事をしているのかは、十年近く付き合ってる僕でも知らない。けれども一週間に必ず一日は帰って来てくれる。悠さんは外見はだらしく優男で頼りなさげだが、何故か僕が悩んでいる時、苦しんでいる時はいつもいてくれるんだ。だけど、いつもは、いないし昼間に家にいる事はないから、僕は、自然と家事ができるようになったんだ。特に料理はね。

「家に仕事で使うもの置いていてね。取りに帰ったんだけど家でもできる仕事だから行かないことにしたのさ」

「あっそうなんですか。今日は、ちょうど買い物行っただけかしなんで、たくさん料理作れますよ」

「よかった、食いつぱぐれなさそうだな」

「はい」

その日は久しぶりに一人ではない食事をした。その日のメニューは、トンカツだった。

長月2

いつもの長い長いうんざりする坂を登る僕、でも僕の足どりは、軽やか。何故かって？それは、今日は綾戸さんに会えるかもしれないからさ。これを喜ばずに何を喜ぶって言うのさ。

今日はいつもより早く教室の前に着いた。
ガラガラ

「!？」

「わあ、びっくりした。おはよう滝谷君」

僕が教室のドアを開けると、なんとそこには、綾戸さんが立っていた。余りに唐突で、しかも相手が綾戸さんなので一瞬反応ができなかった。

「……お、おはよう」

「あつ、いたいた様子休んでた間のノートみしてー」

綾戸さんは僕が平凡すぎる言葉を言い終わる前に廊下の向こうにいた、友達の所へ行ってしまった。次に声をかけられたら、ちゃんとあいさつできるようにしたいな。僕が自分の席に着いてそんな事を思っていると涼が教室に入ってきた。

「良かったな、今日は綾戸が居て」

「どうせ、僕は遠くから見てるだけだから」

「あの人、お前は周りには秘密のつもりかもしれないが普通、綾戸がお前の態度を見ればお前が綾戸を好きな事はバレバレだぞ」

「えっ！じゃあ綾戸さんは分かってる？」

「綾戸は多分お前をそんな対象として見てないと思う。それに綾戸は、学校中の男子にそういう対象として見られているからな。多分そんな態度をされることになれてるんじゃないか」

その言葉は、僕に大きな衝撃を与えた。しかもモテる涼が言ったから説得力があつた。

「……………」

「まあいいや、そう言えば今日席がえだぜ。知ってたか？」

そう言う涼は、ニヤリと笑った。僕は涼のその表情に嫌な予感がした。

そうこうしていると小林先生がはいつてきた。

「さて今日は、みんなお待ちかねの席がえをしまゝす。みんな準備は良いか」

「「イエース」」

このクラスは、無駄に団結力がある。というか、なんなんだこのノリのよさは。それにしてもさっきの涼の意味深な笑みが気になる。

「じゃあ、詩穂ちゃんみんなにくじをひかせて」

先生に言われると、真田さんは、くじを入れた箱を持って先生の横にたった。窓側の席の人からくじをとっていった。その時僕は、気付いてしまった。涼が真田さんと一瞬目配せをした事を。

何人かがくじを引き、ついに僕の番がきた、後ろに人が並んでいるので時間をかける事ができず。手に当たったものを取った。開いた紙には窓際が一番後ろの席の番号。黒板に書かれた席順表の端に名前を書く、真田さんが僕を満足気な顔をして見ていた。

最後にくじを引くのは、綾戸さん。最後に残っていた席は、僕の隣だった。僕は軽いめまいがした。

「滝谷君、よろしくね」

「うっ、うん、よろしく」

涼が、僕を見て笑っていた。僕はそんな涼をにらみつけてやった。結局その日一日僕は緊張して授業なんて耳に入らなかった。

その日は、涼と帰る気はせず、一人で帰っていると、校門の前に綾戸さんがいた。一人ぼつねんと立っていたので、不思議に思っていると、青いスポーツカーが綾戸さんの前でとまり中から、スーツを着た金髪の若い男がおりてきた。男は、綾戸さんをドアを開けて車に乗せ自分は、運転席に戻りそして車を出し、走り去っていった。僕は、その様子を呆然とみていた。

「ふーん。あれが、理恵のマネージャーかあ」

いつの間にか、後ろに髪の長い少女が立っていた。

彼女の名前は、沖田^{オキタ}祥子^{ショウコ}。涼と僕と同じ小学校に通っていた同級生だ。でも今は違うクラスなのでここ最近、話すことはなかった。

僕の数少ない友達で彼女はともクールで中学の時は僕や涼以外の人は、あまり話しているのは見たことはなかった。でも、今では綾

戸さんのグループとは仲がいいようで、良くしゃべっているのを見掛ける。

「しょっ、祥子いつの間に！てか、さっきの人、綾戸さんのマネージャーなの？」

「理恵が話した内容からすれば多分あの人よ」

ちなみに理恵は綾戸さんの名前だ

「で、綾戸さんは、その人について何か言ってた？」

「へー、弘人、気になるんだ？」

「いつ、いやアイドルに対しての興味だよ。好きとかそういうんじゃないよ」

「別に私、好きとか言っていない」

「うっ……」

「分かりやすいんだから。そう言えば、理恵は、あのマネージャーにしつこく言い寄られて、困ってるって言ってたわ」

「そう、なんだ」

「分かっていると思うけど、理恵は、今フリーだから。弘人にも、チャンスはあるわよ」

「無理だよ。こんな凡庸な僕なんかじゃ釣り合わないよ」

「ほら、そんな悲觀的にならないで。せっかく隣になったんでしょ？」

「なんで、知ってるの？」

「涼が無理矢理にでも隣にするって言ってたもの」

「なんで涼が、そんな事言ってる事、教えてくれなかったの？」

「口どめされたから、それに面白そうだったし」

さすがの僕もムカツとした。

「もういい、帰る」

「あつ、ちょっと、明日は理恵と話してあげてね。理恵は嫌われると思うてるわよ。人に嫌われる事をなによりも恐れてるのよ理恵は」

「分かったよ。じゃあね」

「うん、またね」

僕は、帰り道の間、綾戸さんのマネージャーの姿が頭から離れなかった。なぜなら、綾戸さんのマネージャーは、とてもかっこいい人だったから。

僕は、鉛色の空を見上げ長い長い坂を下り始めた。

長月2（後書き）

見てくれてありがとうございます。アクセス数が思っていたものより3倍位あつて、正直びっくりしてます。忙しいので更新が不定期になることがあると思いますが、一週間に一回は更新できるように頑張りますのでお願いします。

長月3

「おはよう滝谷君」

綾戸さんが隣にいる事が、信じられない僕がここにいた。でも、僕は言わなければならない。祥子と約束したから。祥子は、約束を破ったり、嫌なことをされたりすると恐ろしいから。特に怒った祥子の視線は、人百人はゆうに殺せるレベルなんだ。だから昨日別れ際に交した約束を今になって後悔した。

「おはよう綾戸さん」

僕は自分の言葉に進歩を感じた。

「ねえ、さん付けやめてよ。なんだか、むずがゆいわ。それに敬語もね」

「はい」

「もう！敬語になってる」

「わっ、分かったよ」

それにしても僕は信じられなかった。こうして綾戸さんと話すことがあるなんてこうなる前は考えた事もなかった。僕は昨日の事を聞いてみることにした。

「そう言えば昨日、綾戸マネージャーの車に乗って帰ってたよね？」

「あちゃー、見られてたか。あのマネージャー収録の予定があるの忘れてたらしくて。学校には、絶対来ないでって言ってるのに」

「ふーん、そんなに嫌なものかな、それって」

「まあね。なんだか、息が詰まりそうだったからちよつと反抗してみたかったの」

綾戸はちよつと首をかしげてそう言った。

「マネージャーさんかっこいい人だね」

「そうかな？わたしは好きじゃないんだ。あのマネージャーしつこいし」

僕は綾戸さんのその言葉を聞いてホツとしている自分を感じていた。

「でも、あの人の車かっこ良いよね」

「やけに高い車に乗ってるのよねあの人。それにしても、よかった弘人君が話しをしてくれて。昨日はこっちに向いてもくれなかったから、わたし、嫌われてるのかと思っただけだから」

「そんなわけないよ。僕が緊張してただけだよ」

僕が、話した事がない人でも普通に話せる事は初めてだった。でも不思議とその時、綾戸さん話す自分に違和感を感じなかったんだ

その日、いつものように屋上で涼を待っていると祥子が上がってきた。

「理恵が言ってたわよ。弘人君が話してくれたって。それも嬉しそうに」

僕は以前から気になっている事を聞いてみることにした。

「なんで、あまり人と関わるとしなかった祥子が綾戸と友達になったの？」

「理恵がとても寂しそうだったから…かな？」

「寂しそう？綾戸が？」

「私には、そう見えたわ。私はそんな人、他にも知っているもの」

ちょうどその時、涼が上がってきた。

「またせたな。帰るぞ」

「そう、早く行きましょ」

どうやら、二人は最初から帰る予定だったようだ。いつも僕の意志というものは無視され話しが進んでいく。

「そう言えば、綾戸は何て言ってた？」

「好印象だったみたい」

「何その話、僕のこと？」

「決まってるだろ。脈はあるみたいだから頑張れよ」

家につくまでそんな会話が続いた。家のまえで涼がまた不穏な事を言った。

「とにかく、せっかくの機会だ。頑張れよ」

「からかわないでよ。僕と理恵さんじゃ釣り合わないよ。第一、振り向いてくれるかも分からないのに」

「たまには男らしく決めてみせてよ。私達は応援してるからしっかりね」

そういうと、祥子と涼は帰って行った。

その日の夕方、自分が作った料理を食べていると、つけていたテレビの歌番組に綾戸が出演していた。僕は、元々あんまりテレビは観ない方だったけれど、綾戸を好きになってから歌番組は観るようになったんだ。綾戸は今度新しくCDの曲を歌っていた。その歌は、女の子の失恋の歌で、やけに耳に残った。

長月3（後書き）

今回は切れが悪くなりそうだったので短くなってしまいました。文才無いなと痛感します。

神無月1

十月に入って、綾戸の隣になってから二週間がたった。この間に僕にとつて大きな変化があつた。

「ねえ、弘人君、昨日の映画観た？」

「観ましたよ。最後のところで感動しちゃって」

二週間前、綾戸との会話は、こんなかんじだった。でも、今では…

「ねえ、そう言えば弘人君って女っ気が全然ないけど、好きな娘とかいないの？」

ぼっ

「そっ、そんなのいないよ」

「そうかな、正直に言つてごらん」

「本当に、いないってば！」

「あはははは、そんなにむきにならなくたっていいじゃない。それに弘人君に好きな人いても、告白するような甲斐性無いものね」

と、こんな感じでからかわれる事になった。そして、今日も

「ねえ、芸能人と言えばどんな娘が好き？」

「……………」

かなり核心に近い所を突かれて僕はうろたえてしまった。まさか、綾戸の前で、そんなこと口が裂けても言えないよ。言えたら楽なんだろうけど。

「あれ？どうしたの？顔が真っ赤だよ？」

「なっ、何でもないよ」

「分かった！芸能人で好きな人がいるんだ！」

ドキッ

「誰？知ってる人だったら紹介してあげてもいいよ」

「いや、いつ、いないからいいよ」

「もう、遠慮しなくていいのに」

「何でいつもこんなことばかり聞くのさ？他の男子が隣の時もこんな話してた？」

僕は耐えきれなくなって聞いた。

「だって弘人君、男って感じしないから、安心して話せるし、すぐ赤くなって面白いんだもん。何て言うか、女の子相手に話すように気楽に話せる男の友達って感じ？」

やっぱり涼の言う通りだったが、綾戸さん本人から言われると、シ

ヨックだった。僕が何も言えずにいと、小林先生が入って来た。

「はい、みんないるわね。今日は、面倒だけど学祭で、クラスでやるもの決めなきゃいけないみたいなの。だから、やりたいものある人は拳手して」

教室は、突然の暴挙に静まりかえってしまった。しばらく沈黙が続いていたが、小林先生の

「無いなら、私が決めようっと。うゝん、…」

この後の言葉が出る前に真田さんが手を挙げて同時にさげんだ。

「カフェがしたいです！」

すると小林先生は、残念そうな顔をして言った。

「みんなはそれでいいの？こんな無難な、何の面白みもないような物で？」

「……はい！」「……」

僕を含めたクラスの全員が揃って返事をした。こうしてカフェをする事となり。真田さんは、クラスの全員から尊敬の眼差しで見られていた。後で真田さんに聞くと、ただ単にカフェがしたかったただけだって言うんだ。良くあの空気の中で平気に言えるよな。天然万歳。

「それじゃ、明日から準備に入るから、今日中に担当表書いて提出してね。真田さんに紙、渡しておくから」

そう言っと、小林先生は、早々と教室を出て行つた。あの人、先生やる気あるのかなあ

一時間目の授業まで時間があつたので、やってない宿題をやるうとノートを開くと、前の方から真田さんと涼が話しているのが、聞こえてきた。

「…やっぱり、人を呼び込むのは、うちのクラスは綾戸さんがウエイトレスして貰えばいいと思うんだけど、カフェなんだからコーヒーや紅茶や食べ物を作る人が要るでしょ。せつかくだから上手な方がいいじゃない？」

「そうだね、まあ綾戸がウエイトレスをするだけで十分人は集まると思うけど、どうせカフェやるなら、美味しいもの作りたいしね」

「やっぱりそう思うでしょ、だからね料理が上手な人知らない？言つたの私だけど料理上手な人知らないし、みんなしたくないっていつてる」

「俺、一人なら知ってるし、彼なら喜んで引き受けてくれるさ」

僕は、涼の自信ありげな声にこの後の展開を予想出来てしまった。

「えっ！？誰それ！？教えて」

僕は身構えて涼の方を見てしまった。すると涼と目があつてしまった。涼はニヤリと笑うと言つた。

「なあ、弘人引き受けてくれるよな？」

こうして、僕は学祭の日に暑い仮設キッチンで半日を過ごす羽目に

なっ たんだ。

「えーと、セイロンとブルーマウンテンは、買ったね。他にいるものはもうないわね。それじゃ帰りましょ」

僕は今、綾戸と一緒に商店街を歩いている。普通だったら嬉しい状況だけど、僕は単純に喜べなかった。なぜなら……

「はあ、はあ、ねえ少しは綾戸も持っ てよ」

そう僕は学祭のための買い出しの袋を全部持っ て歩いていたんだ。いわゆる荷物持ちっ てやつ。

「男なんだからしっ かりしてよ」

そんな事言われても、買い物袋は腕にくいこみ、指が紫色になっ ていて、僕は限界だった。

「本当に、限界なんだよ。どこかで休もうよ。腕がちぎれそうだよ」

「もう、そんな情けない声出さないでよ」

綾戸は、そう言っ と、周りを見回して言っ た。

「しょうがないわね。あそこの喫茶店で一休みましょ」

この一言で僕は荷物から解放される事になった。窓際の空いていた席を見っ け、僕がメニューを見ていると綾戸がすぐにウエイトレ

スを呼んだ。

「コーヒーとモンブラン下さい」

綾戸はすぐに頼むものをきめてしまった。無駄に焦ってしまう。

「えっと僕は、……ストレートティとチョコレートケーキを下さい」

「かしこまりました。しばらくお待ち下さい」

そう言うと、ウェイトレスは店の奥に消えて言った。

「綾戸って、買い物してても芸能人って気付かれないね。髪型が違
うからかな？」

「うーん、一応髪型は変えてるけど、たぶんみんなこんなところで
芸能人に会うなんて思っていないのよ。ナンパにはよく遭うけどね」

さらに綾戸は僕に微笑んで言った。

「でも今日は遭わなかったわ。横に弘人君がいたからかもね？」

「僕なんかがナンパわけにもならないよ。こんな顔だし、身長低い
し」

「あははは、確かにそれは言えてるね」

自分で言うより、綾戸に言われた方が笑い飛ばせるような気がした。

「お待たせしました」

ウエイトレスが品物を持ってきた。
チョコレートケーキは少し甘味が強かった。

「そろそろ行きましょう。学校に着くまでに日が暮れてしまうわ」
二人ともケーキを食べるとそう綾戸が言い出した。僕は綾戸の後に店をでた。

綾戸は帰りに僕の顔を見ると言った。

「今日は楽しかったわ。弘人君も自信を持ってよ。弘人君にもきつ
とつかいい人があらわれるわ。弘人君には、弘人君の良いところ
があるんだから」

綾戸にそう言われるのは少し寂しかった。

学校に帰る時間が予定より一時間位遅かったので、クラスの男子からは、疑惑の目で睨みつけられてしまった。綾戸に関わると本当に寿命が縮まるような気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5389f/>

流星少年

2010年10月10日05時46分発行